

物語の〈場〉としての「足柄」

田 川 邦 子

源家の棟梁、源頼光に仕える屈強の勇士の存在が、複数で把握されるのは、『今昔物語』（巻二十八）、『古今著聞集』（巻第九）の当初から、すでに定まっていたように思われる。

「四天王」の言い方はまだ出ないが、『今昔物語』には、源頼光の郎等三人が女車に同乗し、賀茂祭の折、斎院の帰館を見物に、紫野まで繰り出す話がある。勇士たちは初体験の牛車に車酔いして、散々の体たらくで、帰途は歩いて帰って来たという滑稽な話である。『猛き兵^{たけつばもの}』どもの失敗談は、書き手の貴族・知識層の、「未だ車に一度も乗らざりける」人々に対する、優越の気分を感じさせるところがある。文化や教養に縁遠い、田舎侍の滑稽な姿態を、鋭い筆法で、かなり意図的に抉り出しているからである。この三人の郎等は平貞道、平季武、（坂田）公時である。渡辺綱の名は見えない。

『古今著聞集』には、源頼光が鬼同丸を誅する話が載るが、「四天王」という言葉がここに初めて使われるだけに、主君を守護する四勇士のチームワークはさすがで、なかにも渡辺綱の智略が、他の勇士よりも際立つ書きぶりになっている。時代は下って、江戸期の四

天王物・金平物（古浄瑠璃）にも、この傾向は歴然たるものがあるから、綱の個性を智略にたけるものとして、四天王の中でも特別視する扱い方も、案外早くから行われていたらしいのである。

さて公時（金時）であるが、これらの例からも、頼光の四天王の一人として、王朝時代の末頃から、すでにその名は、人々の意識中に銘記されていたことがわかる。

「公時」は、今では「金時」と表記するのが普通であるが、古くは「公時」と書くことの方が多い。

正徳四年（一七一四）の、近松門左衛門作『嬬山姥』は、歴代の金時物語の中でも最高の傑作で、人気を集めた作品である。この作の四段目で、「快童丸」を名乗る幼年時代の金時が、頼光と出会い、元服して「酒田金時」を名乗るいきさつが描かれるが、「金時」の表記が一般化して行くのはこの辺りからだろうか。金時物語は子供向けの絵本の、格好の題材なので、これを扱う絵双紙、錦絵の類は、江戸中期以後急増するが、この過程で、「くわいどう丸」であった金時の幼名に、いつの間にか「金太郎」と称するものが現われるの

は、面白い。

「公時」「金時」「くわいど丸」「金太郎」、ちょっとした表記や名称の違いのようにもあるけれど、説話文学から、劇文学を経て絵双紙（童話）へと、その折々の変化を辿れば、表記や名称の推移は、金時という、架空の勇士豪傑に対する、享受者側のイメージの、折々の変化として、跡づけることができそうである。

「公時」という、当り前と言えば当り前の、いささか固苦しいこの書き方は、『前太平記』では、「公に事するに時を得たり」という、渡辺綱の祝詞にヒントを得て、頼光が命名したとしている。これは「時あてつかゆる君なれば、かれがなりのをば、きん（公）時とめさるべし」という、『清原右大将』（古浄瑠璃）中の、我子を家来として、源氏の大将に奉げる折の山姥の言葉を、踏襲したものと思われる。勇士が、「時を得て、公に仕える」ことの、晴れがましさと、その意味の重さが、まだ実感として残っている時代であった。

『清原右大将』は、数多い金平浄瑠璃の中でも、頼光四天王の成立を、主題の一つとしている作品なので、成立はかなり古いと考ええてよい。和泉太夫正本、岡清兵作の『宇治姫切』（明暦四年正月刊）が、この作品の、続き物語風の内容を持つところから、『宇治姫切』以前、明暦三年頃の成立で、岡清兵衛の作ではないかと言われるほど、構成、詞章ともしっかりしている。近松の『嬬山姥』も、この作品に依るところが、少なくない。

『清原右大将』では、公時の幼名は「くわいど」である。「くわいど」は、「怪童」の意であろう。山中に育った山姥の子は、奇怪な姿をした童児である。その怪力と、物怖じしない風貌は、人間であ

るよりも、神の領域に属している。「くわいど」とは、そういう神性を付与された童児に対する、畏敬の念をこめた呼称である。

『嬬山姥』では、「くわいど」は「快童丸」に変わる。人気者「金太郎」までは行かないが、畏敬よりも親しみがこめられ、この頃から「公時」よりも「金時」の方が、通りがよくなる傾向も定着する。

頼光が、山姥の母子に出会う足柄山の場合（第五）を、『清原右大将』は、次のように語る。

然る折ふし、そばに有ける大のいわ、二つにわれ、一人のらうに、十六七成わらはか手を引立出、われこそはさんかをめぐるぎ（鬼）ぢよにて有。されは此子を、じんりんにましはらせ、りんゑのかうを、まぬかれさせんとねがへ共。あきつしまが其内に、しうと頼ん物なく、むなしくもだす所に。御身のふゆう間に付てたのもしし、此くわいどを奉る。かしんとなさせ給へ、時あてつかゆる君なれば、かれが名のりをば、きん時とめさるべし、いかにくわいど、おやとな思ひそ、おにぞかし。りんゑのがうたすけてゑさせよ、ばんしは頼ん／＼と。たちまちき女とげんし、こくふにとんでうせにける。くわいどは、おんあいのなごりたへがたく、しばしあきれて立にける。

大岩が裂け、その間から、山姥に手を引かれ、十六七歳の怪童が出現する。母の山姥は鬼女に變じ、「くわいど」を頼光に奉げ、虚空に姿を消すのである。

この作品を十年ぶりに読み返し、その直後、金時山に登った私は（金時山は初体験）、途中、金時の「宿り石」と称する、見上げるばかりの大岩があり、それが見事に左右にぱっくり割れているのを見

て、驚いてしまった。仙石原の金時神社から、十五分ほど登った所である。もっともこれは後で分ったことであるが、この大岩が縦に裂けたのは、昭和六年頃のことであるらしい。^(注3)

作者がこの大石を知っていたかどうかは、今となっては知る由もない。割れてはいなかったにしろ、足柄、箱根で評判の大岩について、何かの噂を、聞いていたのではなからうか。

浄瑠璃作品は、過去の歴史や伝承、民譚、世間の風聞などを手掛りに、空想を紡ぎ合わせつつ、人間の真実を語り描くのだが、空想や想像を喚起する源には、信仰の要素があることは否定できない。作品中に描かれる、特定の「場」について、作者が実際にその地に足を運んだか、否かを問題にしても、あまり意味はなく、ほとんどの場合、現地取材などしなくても、作品は書けたであろうと思われる。信仰上の共鳴に裏づけられる、空想や想像は、居ながらにして、全てを把握しうる、普遍性と、強い喚起力を持つからである。

山姥信仰という、土俗的な普遍性の他に、『清原右大将』には、当時の関東・東国圏特有の政治性と、かなり深い繋りを持つ、特別な精神的、思想的な特色が、いくつかあるように思われる。

まず冒頭に、

ここにせいわ(清和)のかういん(皇胤)、六そんわうのちやくなん(嫡男)。としまの左衛門まんぢう(満仲)とて、るいだいの名將あり、ぶかう(武功)のほまれよに高く、いづ(伊豆)、するが(駿河)の内にて、すか所給はり、すんしうふ(駿州府)中にきよちう有、(括弧内は筆者)

とは、あきらかに、清和源氏の嫡流源満仲を、駿州府中に退隠した、大御所こと徳川家康に重ね合わせる発想である。徳川氏が、源氏を自

称したことから、満仲・頼光物語を語ることは、間接的には徳川家の武勇や覇権を讃美することになり、それ故金平浄瑠璃を、体制讃美の劇だとする見方も、^(注4)基本的には成り立つのである。

これより後の作品に、公時の子金平が登場する、出羽掾正本の『金時都いり・すくねの悪太郎』(寛文四年)がある。この作品では、金時は、数度の功名により、頼光から駿河の国を給わり、府中の城で栄華に暮していた——となっている。出羽掾は上方で活躍した太夫である。和泉太夫・岡清兵衛のコンビが、江戸で人気を博し、作品も優れていたこと、また金平浄瑠璃が、後に江戸歌舞伎の荒事芸に、大きな影響を与えたのは、誰も知る事実である。このため金平浄瑠璃の流行は、江戸のみの現象と考える向もあるが、実は上方にも流行したわけで、大坂の出羽掾はその代表的な語り手であった。それにしても、頼光ならばともかく、金時を駿河府中の城主にしてしまおうとは、『清原右大将』の響みにならったのは明白であるが、金平浄瑠璃の精神的な傾向をよく物語っているといえる。

公時と「足柄」の繋りもまた、このような、徳川時代初期の精神的風潮が生み出したもので、それより以前に溯ることはできないように思われる。勿論「山姥伝説」や、「山中怪童」の伝承など、上古以来の普遍的な民俗伝承の痕跡を、「足柄」の中に探るものもよいであろう。しかしそれは「足柄」に限るものではなく、山国の日本では、全国至る所に残っている。足柄の金時を考える場合も、このような普遍的な民俗伝承や、神話的共同幻想の世界に、物語成立の根拠を探し求めるだけでは、やはりその時代の特殊性は見えてこないように思われる。江戸時代の初期に、新たにこのような物語が成立して来たという事実を前提に、その精神的背景を尋ねることも

また必要ではないかと思う。

『清原右大将』は、「公時」を「足柄山」に結合する、最初の作品であるが、よく読めば、「足柄」は、「公時」との関係のみで、語られてはいない。八文字屋板の五段本（新群書類所収）には、「おや四天王のはじまり」の、別題がつくように、主題の一つに、頼光と諸勇士の出会いと、四天王の成立があり、その「場」が、他ならぬ「足柄」なのであった。

清原右大将は、皇后の兄であり、高位高官の我倭者、満仲と対立している。満仲は讒言により須磨に流され、頼光も駿府に居られなくなり、妻の父の大庭氏を頼り、相模に落ちる。舅の裏切りと、妻の自害。型通りの悲劇であるが、裏切るのが大庭氏であるのも、源頼朝の挙兵の物語が幾分反映しているかもしれない。

大庭氏に捕えられた頼光が護送され、三島の宿に宿るとき、頼光を救い出し、足柄峠へ逃がすのが、後に四天王の一人となる、うらべ（卜部）の六郎である。彼は源家譜代の郎等の家の生まれである。父親は主家の勘気を蒙り、三島の地に引籠り、死去するが、その遺志により、主家に復帰する機会を待っていたのだ。

足柄峠で、頼光とうらべ六郎（すへ竹）が、感激的な主従対面をするところへ、一人の貴女が、弓を携え、天から舞い降りる。弓の名人ようゆう（養由基のこと）の息女である。彼女は父の遺志を守り、三界流転の果てに、父の遺した弓の秘術を、頼光に相伝するため、日本に飛来したのだという。こうして「足柄山」は、武神と聖女により、聖地化され、神話化され、その後に「くわいど」の出現を見るのである。

聖女降臨とは、話が荒唐無稽に過ぎるので、見逃しがちだが、

『水滸伝』の「九天玄女」の例など、伝奇物語中に見る常套的な神話化の仕掛けであり、作者の意図や目的は、はっきりしている。ここでは大陸伝来の武神による、「足柄山」の聖地化である。『清原右大将』では、東国関係の地名には、駿府、相模、三島、信濃などが登場するが、これらの中心にある「足柄山」は、全国統一を果して、関東に政権の中心を据えた徳川氏の權威を、肯定する姿勢を背景に、特に選ばれた「聖地」なのであった。

当時はすでに、「足柄山」より、箱根の山の方が、軍事上交通上の役割は大きかったはずである。だが現実には現実として、權威の象徴として選ばれるのは、やはり「足柄山」でなくてはならなかった。これはおそらく、「足柄山」は、『万葉集』に「足柄の御坂の神」と詠まれ、『古事記』の日本武尊の東征神話にも描かれるように、神の居る場所として、特別視する認識が、古くから行きわたっていたからであろう。

『前太平記』が何時頃成立した作品であるか、特定するのは難しいが、坂垣俊一の説に従い、元禄初め頃としておきたい。同書巻十六「頼光朝臣上洛事付酒田公時事」にある、公時名付けの条では、前述したように、「清原右大将」の跡をなぞっているのだが、それは渡辺綱が、頼光に奉る祝詞

美王斯に有り。公に繼て蔵したり。善き賈を求めて沽諸。今善き賈を求めたり。公に事るに時を得たり。善き賈を求めて沽諸。今善き

によるのだとする。これだけでも分かるように、全体が漢文読み下し調の文体である。筆者の、中国古典や歴史書への造詣が深かったことを思わせる箇所は、随所に見えるが、公時受胎の模様を描くと

ころは、

妾、嘗て此山中に住む事、幾年と云ふ事を知らず。一日此巔^{いんざき}に出で、寝ねたりしに、夢中に赤竜来たつて妾に通ず。其時、雷鳴夥しくして驚き覚めぬ。果して此子を孕めり。

とある。これに続いて本文には、「漢の高祖」の、受胎と出生の不思議を述べるくたりがあるが、この書の公時誕生譚も、『史記』の「高祖本紀」そのままであるといつてよい。つまり公時を雷神（龍神）の子だとしたのである。

こうなると、『山城国風土記』逸文にある、賀茂神の丹塗の矢の縁起談や、『日本霊異記』上巻の、道場法師の話など、雷神の感化によって生まれる、神の子の物語との共通性を、すぐに考えてみたくなる。そして足柄の深山にも、神の子の誕生譚が、古くから伝えられ、それが名高い勇士公時と結びついたのであらうとする、民俗伝承から文学への展開を推測する考えに行き着くわけだ。

足柄と公時の関わりは、だいたいこのような説明で、今迄は行われて来たように思う。しかし『清原右大将』や『前太平記』など、文学作品を資料として用いる以上、これらテキストの中で、〈足柄〉や〈公時〉が、如何なる発想のもとに、どのような描かれ方をしてあるかを、検討してみなければならぬ。〈足柄〉は、現実の支配者や、その祖先神との関りで、新たに聖地化された〈場〉であり、〈公時〉は、雷神のイメージにより聖化される傾向にあるが、それは漢の武帝の誕生譚のひそみに習ったものであったことを、いち応今回の結論にしておきたい。いづれにしろ、支配者が採択した政治哲学が、外来思想（儒教）であった時代に相応しく、これまた外来の神々の手助けによる、文学形象であった。

公時と足柄の関係が、近世になっての新しいものであることは、地名からも証明できる。『新編相模風土記稿』（天保十二年）によれば、金時山は別に「猪鼻ヶ嶽」という名を持ち、この「猪鼻ヶ嶽」が本来の名であるように書いている。また『日本歴史地名大系』では、明治中期に、「金太郎」が小学校教科書に登場してから、山名も「金時」に定着したと記すのである。

金時の誕生地、宿り石、蹴鞠石、太鼓石、兜石などの遊び石、金時踏破石、つぶて石、金時のふみまたがり石、ふんばり石、そして金時神社と、金時の名の付く遺跡は、足柄上郡の至る所に散在する。それらを場所により、三分すれば、足柄古道方面にある、地藏堂付近、金時山と、その山麓の仙石原、そして足柄峠から静岡県駿東郡方面に下って、小山町方面ということになるだろう。静岡県側には行かなかったが、あとの二箇所を訪れ、巨大な、または中程度の岩石に、金時の名が付されるのを幾つも見て、これはやはり一種の、巨石信仰ではないかと思った。巨大な岩石が割れ、そこから山姥と公時が出現するとした、『清原右大将』の描写に、妙に実感がこもるのも、そのためであらうか。山姥や金時に先立ち、足柄には、石の信仰があったのかもしれない。

近松門左衛作『山姥』（正徳二年）が、頼光四天王成立と、金時出生譚を語って傑作であるのは、いうまでもない。しかしこの作品には〈足柄〉は全く登場しない。このことは、〈足柄の公時〉が、中世以来の伝承からは説明しきれない、新しい近世的要素を受け、新しく誕生した伝説であることを、逆に物語っている。

『山姥』の全部を、ここに紹介する余裕はないが、登場する地

名の東限は、東海道に即しては、浜松、小夜中山までである。近松が足柄を無視したのは、公時の生誕地が足柄であるとする認知が、未だ一般化していなかったこと、謡曲の『山姥』の方に、自作の表現を助ける有効な要素を、多く含んでいるのを知っていたからであろう。謡曲は『山姥』の他に『黒塚』（安達原）も使われる。

「頼光道行」から始まる第四段は、頼光が「名をだに知らぬ山中に」迷いこみ、「山賊の張本」卜部の末竹を、家来とし、さらに行けば、山姥に出会う。その場所は「信州上路の山」である。

〈あげる山〉は、〈足柄〉に対抗する、有力な金時出生地である。しかしこの〈あげる山〉にも混乱がある。『近松浄瑠集下』（日本古典文学大系）所収の『嬬山姥』の、「上路の山」の注に、「新潟県西頸城郡。親不知の上の山。信州ではなく、越後国内」と記すのも、この混乱の表われであろう。

近松は、「信州上路の山」とはっきり書いているのに、なぜ校訂者は、それを間違いとするのか。「上路の山」は、越後だけではなく、信濃にもある。「北は越後越中の境川。是も谷二つ越え、十里に余れば今日の中には思ひもよらず」と、信州の上路の山が、越中越後境川の、親不知の上路山と、距離的に隔つことを、近松は強調している。いうまでもなく、越後境川の上路の山は、謡曲『山姥』の舞台として、知られている場所である。

信州の上路の山は、木曾山中の、南木曾岳の別名で、「木曾第一の難所なり」と、『大日本地名辞典』にも記す。柳田国男は、「信州木曾の金時山などでは、現に金時母子の棲んだといふ巖窟、金時が産湯をつかったといふ池の跡の他に、麓の村々の石の上には、此怪力童子の足跡なるものが幾らもあって、寧ろ山姥が自由自在に山又

山を山巡りするといふ、古い評判とも一致する」（全集第四巻『山の人生』）と書く。

山姥とは、山中に棲む鬼女であるが、近松が山姥を描くとき、最も執着したのは、この自在に山巡りをするという、山姥の特性である。飛行自在は、神の特性であると共に、人間の情念を解放する効力を持つ。からくりを使つての舞台効果も、大いに期待できるはずだ。謡曲『山姥』の詞章は、この自在性をよく表現し得ており、近松は自作で、巧みにこれを利用したのである。足柄の山姥には、柳田が「古い評判」と言った、山また山を飛行する、スケールの大きさ、つまり中世的自在性に欠けるところが、物足りないのである。

山中の鬼女には、飛行自在の山姥とは別に、『黒塚』の鬼女がある。例の「見るな」の禁忌を犯す旅人を、鬼の正体を顕わに、追跡する、恐しい老女である、近松は、飛行自在の山姥に、この「見るな」の禁忌を課す、黒塚の鬼女の特性をプラスして、怪童金時の母親像とした。

鬼女の二つの特性を、併せて描いた『嬬山姥』では、山姥の住居は、山また山の、山奥となる。信州木曾の上路の山は、濃密な山の深さという点で、近松の狙いにもっとも相応しい場所であった。越後の上路の山も、足柄も、海に近すぎる。特に足柄は、東海の明かるとい海に面しているの、鬼女や山姥が、自在に行動するには、いささか不便であったのかも知れない。

柳田国男は「之を四天王の一人に托するに至って、足柄ばかりが有名になったのみならず、前後唯一度の奇瑞の如く解せられて、却って俗説の遠い由来を、尋ねる途が絶えようとするのである」（前掲書）と、残念がっている。しかし「足柄ばかりが有名になった」

のは、それなりの理由のあることだ。源氏（徳川氏）との関係で、足柄が聖地化されたことが第一の理由であるとすれば、次には都市文化の果す役割を考えなければならぬ。特に出版活動の影響は無視できない。この次には江戸時代、特に江戸で出版された、絵双紙や錦絵を見ながら、もう一度「足柄山の金時」を考えてみたい。

（未完）

〈注〉

注1 『金平浄瑠璃正木集 第一巻』の解説。

注2 引用は『金平浄瑠璃正木集』による。但し八文字屋本（『新群書類従 第九』に所収）との異同を示すための、石傍に附した註記は省略した。

注3 大島建彦「山姥と金太郎」（『天文学』所収）。これは調査の行き届いた論文である。同論によれば、昭和初年頃から、ジフテリアがこの地に流行し、六年には石がま二つに割れたので、金時の祟りではないかと人々が恐れ、昭和八年から、丁重に祭を行うようになったという。現在の金時神社（仙石の登山口にある）は、その後、昭和三十六年の建立であるから、全く新しいものである。

注4 室木弥太郎「語り物（舞・説経）の研究」の「金平浄瑠璃と和泉太夫」など。

注5 『叢書江戸文庫 前太記上』の解説。

注6 前掲の大島論文

（本論は学内の共同研究「足柄の伝承と文学」の第一稿としてまとめたものである）

文芸科賞（第十六回）について

文芸科賞は、課外の創作・評論活動における優れた成果を顕彰するために、応募作品中、優れた作品を提出した文芸科学生に贈られる。

平成六年一月三十一日締切の今回、応募作品は、小説五編、詩三編、計八編であったが、文芸科教員全員による選考の結果、小説「腹」（青木千佳子・二年）と小説「墓標」（奈良岡優子・一年）に対し「奨励賞」を贈ることに決定した。残念ながら今回も「受賞なし」の結果となったが、全般に力量が上っており、翌年に期待を抱かせた。

選考結果は、平成六年十二月七日の文芸学会の席上において発表されたが、応募作品及び応募者名は次のとおりである。

〈奨励賞〉（小説）「腹」	二年	青木千佳子
〈奨励賞〉（小説）「墓標」	一年	奈良岡優子
〈奨励賞〉（小説）「港の午後」	二年	岩田亜希子
（小説）「サイレント」	二年	鈴木 直美
（詩）「月時計」他	二年	笹本 輝美
（詩）「ナルシズム」	一年	納谷 美賀
（小説）〈ショート・イン・ショート〉「紙」他	一年	篠崎 郁子

なお、第十七回文芸科賞募集は平成七年一月締切で行われた。